―死の通州脱出記―

同盟通信社・北支特派員
安藤 利男

尼港（註：ニコライエフスク）の邦人大虐殺事件に、比較にならぬ未曽有の邦人大虐殺事件が、皮肉にも徹底親日を標榜し、親・日満地帯として常識化されていた冀東防共自治政府の所在地、通州に於いて行われたのは去月２９日、未だ僅か１０日以前の事ある。

事件発生の報と共に復讐の念に燃え立つ皇軍の急襲によって、此の鬼畜に等しい支那兵は、したたかに報復せられ日本軍の手によって、通州は完全に治安は確保されているが、この厄災に遭った邦人の親子、兄弟、友人等は今尚、遭難者の探究にあたり、或は生存者との再会にに蘆去年喜び、或は無念の死を遂げた死者の遺骸を、気狂いのように探し求めている。ああ、何たる痛恨事であろうか。

筆者は此の多数なる遭難者の一人として事件当日通州に止まり、幾度か死線を突破、飢渇と闘い勝ち天運の加護と人の情けとによって辛うじて萬死に一生を得、山野を彷徨４日３晩の後、漸く北京（註：当時北平ペーピン）に辿りつき、目で見、耳で聞き、身を以て経験した戦慄すべき当時の状況を、通信員として広く世界に報道するを得たのであるが、今、静かにこの遭難を思い起こせば、恰も夢の如くうつつの如く、只生々しい記憶のみが、恐怖と戦慄を蘇えらせるのである。今、遭難によって悲むはむべき最期を遂げられた我が同胞の精霊に対し、筆者はひたすらに其の冥福を祈りつつ我が遭難記を捧げたい。

私（註：安藤利男氏。以下同じ）が通州に入ったのは２７日で、○○部隊が○○より通州へ前進するのに、随伴したのであるが、当日は通州南門外に駐屯する敵２９軍に対し我が掃討攻撃が行われ、通州には硝煙去って間もなく、２８日夜には田村中尉、内田少尉以下１１名の陣中告別式が、北京方面より殷々たる砲撃の間に行われたのである。２８日、即ち事件発生の前日、私は午後４時殷汝耕(インジョコウ)長官と、政府に於いて会見３０分程、種々時局を語り、支那軍２９軍掃討工作一段落後と共に冀東政府の時局声明を発する心算であるからよろしく、と語っており、夜は１２時半、即ち事件発生の２・３時間前まで、冀東政府内に止まり、東京よりのラジオによる、北京方面の戦況一般状況を聴取していたが、只、事件発生の伏線として、今考え得る事としては、同日、天津－通州道路が５０数ヶ所に亘って破壊された事。及び同夜の南京放送が「２４時間以内に北京日本軍が天津を撤退しなければ、２００台の飛行機を以て北京、天津を爆撃すると通告した」「北京、天津、豊台は支那軍に包囲され、郎坊は奪還された」「蒋介石は目下鄭州にあり全軍を指揮している」等、頻りに支那軍の戦勝を放送し、盛んに抗日気勢を煽っていたが、全北支の抗日軍、殊に冀東保安隊に、より誤れる状勢判断の有力なる基礎を与え、反乱誘致の直接原因となったのではないか！　と思われる。

◇

さて、事件の発生は午前２時半頃からである。同夜半、保安隊の動きに不審を感じた日本警察その他の関係者は、電話を以て警報をしていたが、それも一少時で、２時半過ぎには電話線は完全に切断され連絡は不可能となっている。

冀東政府長官殷汝耕氏が反乱部隊のため住宅を襲われたのは、その前後であると、殷氏

側近者は語っている。

私は当日、冀東政府より僅か３００米の日本旅館・近水楼に宿泊していた。近水楼は蓮池に囲まれ、僅か三本の細道を以て外界に通じているが、当夜、同所にあった邦人は宿泊客、女中、その他を合して１９名であった。

私が第一の銃声を聞いたのは、午前４時少し前で、それから得体の知れぬ銃弾が、暁の静けさを破って、池の上、城壁の頭をかすめていたが、次第に機関銃の音、重砲の炸音が加わり、殊に南門及び西門付近に、銃砲声は集中されていた。城内地方地域にある政府の方からも時々銃声が起こった。近水楼の邦人は午前６時半頃一階広間で最後の朝食をとったが、誰一人銃弾の危険を犯して外界と連絡し得る者なく、私も残念ながら、僅かに門前に立って形勢を探って見る程度に止めざるを得なかった。

午前７時頃南方に市街ま人家を越えて遥かに二条の黒煙白煙が上がり、銃砲声は益々つのるばかりで漸く只ならぬ形勢となった。保安隊の兵変とは尚も気づかず、まさかと思っていたが午前７時半、第一報は前夜市内に外泊していた近水楼のボーイ、王(ｵｳ)によってもたらされた。王は玄関に駆け込むなり、歯の根も合わず「大変です！　北京館、朝日館の前あたり大通りに日本人が沢山殺されています。保安隊が市内に一杯です。大変です」と云ったまま何処かへ姿を消してしまった。

私は最も懸念していた保安隊の寝返りと初めて知り、大暴動の発生を直覚、冀東政府の運命もこれによって左右されるのでは無いかと思った。しかし邦人殺戮が何故に行われるのか、事件の性質発展性等について再考して見たが、的確な判断は情報の基礎もないので到底出来ない。午前８時頃、王が再び現れた。甲斐少佐（特務機関副官）も云われました「日本人は安全な所へ逃げて下さいと云う話です」

事態は愈々明白とになって来た、そこで私は、使者として王な手紙を持たせ「政府の責任を持つ自動車を近水楼に廻してもらいたい」としたため、これを冀東政府秘書室に持ってゆくよう命令したがそれは何の効もなく王は出かけたまま、ついに帰って来なかった。

近水楼邦人の不安は漸く深まり刻々切迫する事態は恐ろしい圧力で押して来た。午前９時すぎ一人の乞食風の男が近水楼の台所際に現れ食べ物を呉れとねだっていたが、「あれは便衣隊だ！撃っちまえ」と云いながら、拳銃を持った一人の宿泊客がそれを追っ払ったが、それから間もなくであった。近水楼付近に南方支那家屋の密集地帯から頻りにピストルの音が鳴り始め、それが次第次第にこちらに近づいて来るのである。最初は２・３０メートル先方であったが、その銃撃もますます多くなり、無気味な拳銃の来襲である。遂に一軒置いて先の支那家屋で一弾、続いて隣家でといった調子で、午前９時半頃とうとう、第一弾は我等の身辺間近く、近水楼の軒下辺りでバンバンとやられた。一同はび吃驚仰天し申し合わせたように、どっと二階に駆け上がった。そして窓越しに外の様子を窺って見たが、直ぐに第二弾は来なかった。此の間に我々は二階の畳を起こし窓際に立てかけ、防塁を築く一方、扇風機、アイロン、衝立、椅子等を梯子段の真上廊下に並べ暴兵が上がって来たら頭から叩き付ける爲、攻防の準備を終えたのであるが、如何せん１９名中婦人が１０名以上で、宿泊客中ピトルを持った者が一人、武器は無いも同様である。「抵抗せずに隠れよう！」誰かがそう言い出した。大勢は全然押されている。誰も反対する者は無かった。黙ってそのまま屋根裏に上がっていった。

テーブルを重ねて廊下の最上の切り窓から一人二人と屋根裏に上がって行った。私もそ

の中な入った、ここが最後の隠れ家である。しかしどうしたものか１９人の中、屋根裏組は男女１１人しかなく他の者は別法を取り一階及び二階の押し入れに隠れたらしい。屋根裏組の１１名は布団を布して皆その位置に丸くなって音を立てぬよう、身動きも禁じられた。共同の運命を背負って同じく、この屋根裏の人となったのであるが、どの人がどこの何さんであるかも紹介もなく、只、私の知人としては冀東政府の宮脇顧問、朝鮮銀行の三島氏が判っているほか、あとは判らない。我等が屋根裏に隠れて間もなく俄に足元が騒がしくなり、拳銃の音は遂にこの家の中で聞こえ始めたのである。荒くれた人声が高くガヤガヤと聞こえる。

私はそっと立って側壁に空けられた縦２尺(約27㌢)、縦１尺(約17㌢)のガラス窓から異常なる外の様子を見つからぬよう注意しながら覗いて見る事とした。暴兵が、暴民が、近水楼の西面する表玄関から相当入り込んだらしいが、裏口の方、即ち東側からもどやどやとやって来た。見れば、それは３・４０名の学生群ではないか。真っ黒では無いが濃い霜降りの服を着て、学生帽を冠っている。彼等はピッピッピッと三調子の笛の音を合図に、蓮池の中を通じる裏道を一歩一歩押し寄せて来る。彼等の中三人五は拳銃を握っているのもある。間もなく近水楼の裏庭までやって来た。私は彼等に感知されぬよう、視線の合致を恐れた。約２０メートメ引き離されているだけで外は明るいが内は暗いので見えないらしい。学生団はとうとうドヤドヤ室内に侵入した、足元の騒然たる音は益々酷くなった。銃声が交じっている。かん高い声と共に、バリバリと物を剝ぐ音が聞こえる。ほんの足の下直ぐの所でコツコツ音さえする。我々は息を凝らした。

私は、生まれて初めて掠奪なるものを目撃したが、先ず夜具、座布団、トランク、カバン、椅子、テーブル、我々が先程ならべた扇風機、アイロン、その他、あらゆる家具、什器をひっかついで裏道伝いに逃げるようにして持ってゆく。近水楼の庭近くの北側に巡補（**註：以下「補助巡査」とする**）の溜りがある。最初のうち５．６人の彼等は壁の後にかくれながら、この来襲を阻止していた。「撃つな！止めろ止めろ」そんな言葉が聞こえた後「日本人は皆逃げた！誰もいない！帰れ帰れ」と呼ぶのが私の耳に入った。補助巡査は平生から近隣の誼みを持って近水楼を襲撃から救おうと努力していた。学生団の掠奪がひと亘り済んで、彼等の影が見えなくなってから、何ぞ図らん！補助巡査が掠奪を始めたではないか！　支那鞄のようなもの、布団などを屋内から担ぎ出して駐在所の中に何度となく運ぶのが見える。掠奪団は二度も三度も入れ代わり立ち代わり現れては去った。その度毎に皆は肝をつぶして、身しろぎも出来なかった。

１１時半頃、また一際足元の騒動が激しくなった。私はそれまでの事件の経過を走り書きに藁半紙に書き続けていたが、もう駄目だと思って遺書を書き出した。先ず、５年も会わぬ東京の母に宛て、そのほか恩人知人にも書いた。しかしその後もなお暴兵が屋根裏まで上がって来ないので、その後の経過を更に書き足したが、下の様子が激しいので、１２時半頃には、もうそうする余裕と落ち着きを失ってしまった。恐る恐るガラス窓からソッと外を覗けば、今度は政府の方から、青服に軍服をつけて銃を肩にかけた、昨日までよく見慣れた政府衛隊の一団が池の路を渡って、続々とやって来るではないか！　どこから来たか屋根を撃って銃弾がビューンとやって来た。土のかけらが屋根裏の中に飛ぶ。私はジッと頭を下げた。５・６分もしないうちにドタンドタンと物凄い足音と人声が足元に響いて間もなく、遂にわれわれの最後の隠れ家は発見された。

時計を見ると１２時半、屋根裏に上がる押し窓が下から動いた一瞬、さっと電光の如き冷気が走った。軍服の衛兵が押し窓に顔をぐっ突き出した時は、皆諦めたようだ。補助巡査の誰かが教えたに違いない。同じ穴のむじな奴がと怨んだが、もうそんな時ではない。

衛隊の先頭は、拳銃を一わたり廻すと「金を出せ！お前等を保護するから」と叫んだ。比較的押し窓に近く位置していた者から立ち始めて、そしてそれぞれの有り金を出して渡した。今一人の衛隊が上がって来た。私は東側の一番はづれにいたが見つかった以上仕方ない。恐る恐る近づいて５元札を１枚２枚と渡した、押し窓の下にも５・６名の暴兵が同じように金を要求している。押し窓の穴からまるで降るように５元１０元の札が散って、下では彼等が手早くポケットに奪い合い、ねじ込んでいる。衛隊は二階に下りる時、手を貸して呉れた。有り金、持ち物を取り上げてしまうまでの御親切である。皆二階に下りると辺りは全く狼藉を極め、襖まで外された後である。ハッキリ荒れ果てたあとに、下りると直ぐにに身体検査である。先ず拳銃はないかと腰のまわり、ポケット全部を探られたがその折手辺り次第に中の物を引き出し持金は一文残らず取り上げられた。写真機、時計、万年筆からシャープペンシル、女は指輪、帯留、髪飾り、ハンカチに至るまで、全部をはぎ取った。私は折角書いた原稿と遺書までとられた。それに一番参ったのは眼鏡で、これだけは止めて呉れと拝むように頼んだが聞き入れよう筈がない。結局私は洋服にネクタイ靴下だけになった。しかし幸い時計がワイシャツのカフスの下にかくれていたので残ったのである。そして男子６人は片腕を麻縄でくくられ数珠つなぎにされた。保護するのに縛るとは何事だ！　口惜しいが抵抗すればズドンと来る事確実である。１１名引き立てられて二階から梯子段の曲がり目を廻ると、ああ！　何たる惨虐がすでにそこに行われていた事か！。　一階入り口付近の廊下に５・６人の日本人男子が折り重なって倒れている。婦人は髪の毛をバラバラに乱し、グッと食いしばった口元から生血が溢れでている。胸のあたり腹部をやられたか血が着物を通して沁み出ているもの。顔面から血の滴り落ちているもの。何れも縦に横に手を投げ、足を抛り出して無残の最期を遂げているのである。その辺りに女の衣装の入った柳行李なども散らばっていた。何時頃やられたのかも判らない。暴兵共は拳銃を擬して早く通れ！とせき立てる。よく見る暇は与えられない。誰が死んだか、見たくとも見せて呉れないのである。このほかに一階二階で誰がやられていたのか皆目判らない。只、１９人だけである。我等はひこで死んだ人達に黙禱を捧げながら鬼気迫る表玄関を出て軒下から裏庭に引き廻された。

我等も間もなく同じ運命に曝されるのだ。誰も彼もそう思ったであろう。保護とは何たる偽言であるか！　罪も無い婦女子を惨殺してどうしようと云うのだ。鬼奴！　畜生！

しかし抵抗するにも身は縛られ、しかも空手である。そんな奴等の手で自分も倒れるのが諦め切れぬ残念さだ、私は此の時分から何とかして逃げようと考え出した。

裏庭に来ると下にいた婦人のうち、女中２名が、２・３名の衛隊に囲まれて生き残っている。どうした事かと思ったが、二人は直ぐ我等の中に加えられた。そして皆土下座を命ぜられた。もう口も開いて物を言う者は無く、ガクリと頸を垂れて血の気を失っている。今にもここで銃殺されるのではないか！　恐怖の戦慄が悪寒となって身体を走った。一人健気な婦人が立ち上がった！　そして許可を得て家の中に入って行ったが間もなく水の入った鉢を持って戻ってきた。末期の水だ。皆この水鉢に口をひたして次々と廻した。「皆さん！覚悟しましょう」その婦人は云った。「覚悟をしましょう！」反射的に皆そう答え

たが元気がなかった。

そこへ一人、足を撃たれた日本人のお爺さんが衛隊に抱えられて連れて来られた。歩けないのである。しかし間もなく表口の方へ運ばれて行ったが、拳銃の事で今一度二階から屋根裏まで連れて帰って来た人の話では、その爺さんは表口の方で三発撃たれて殺されたそうである。

成程、丁度その時刻に直ぐ近くで銃声が聞こえた。政府の方から続々と別の衛隊がこちらに移動し、我等の前を通る毎に銃を擬して脅して行く。私は隊長らしいのに聞いてみた！　「救命か？不救命か？」と率直に、彼は「放心態！」と一言冷たく言い返した。「安心しろ」と云う意味であるが、全然あてにはならぬ。しかし、そこで銃殺は免れ、更に、１０数名に引き立てられた１３名は、財政庁という看板のある政府の一院に連れてゆかれそこは衛隊が占領し、院内は一杯である。院内の入ると、そこに先着の内鮮人約８０名が軒下に塊となって腰を土に下ろしている。内地人は１０数名！　我等はその仲間入りを命ぜられ暫く待てと伝えられた。そこでは色々な話が出ていた。殺すものなら、とっくに殺しているだろう！　殊によると本当に救うのかも知れない。せめてもの希望をつなぐ言葉が語られる。中には「私は今日奴等に１千円ばかり取られました。今度の事件では偉い損をしましたよ！」と今後も生きて行く事を前提としたような話さえ出た。しかし、護衛についている衛兵共がする話を盗み聞くと決して生かす方針などは無いのである。「あいつは未だ煙草を吸ってやがる」「話をいくらしても何の役に立つんだ！」と云ったような事をこそこそと早口で話し合うのが私の耳に解るのである。私はどうせやられるのだ。遅いか早いかの時間の問題だけじゃないかと、判断を下していた。

はしゃいだ衛兵等の話は振るっていた。「これは殿長官の靴だぜ！」と云って相棒に見せている。成る程、襦子(ｼｭｽ) の立派な支那靴を穿いている。別の衛兵が云う。あの女は殿長官のタイピストで月給１１０円だよ！」平生政府内で警衛に当たっている部隊の事だ！　よく知っている訳である。我等の仲間に入っていた西脇顧問を見て隊長らしいのが、「君は政府の顧問だったね」と云っていた。それが政府の人なら助けるという意味にとりたいのであるが、只云うだけ事である。結局一時間も経つと隊長らしいのが前に立って叫んだ。「これから諸君を北門内の打槍場《註：ママ》へ連れて行く」と宣告した。銃殺場へ連れてゆく、銃殺してしまうと云うのである。日本人の多くは今の宣告の支那語が判らなかったか、別に驚いた様子も無いが、鮮人の中にはもうオロオロと泣き出しているものがある。私は始めから殺すつもりで連れて来たのでは無いか、矢張りそうだ、ダマシ討ちにする貴様等の腹の底は見えすいていた事だ！　貴様等の奸策の手に乗るものか、その時グッと肚にこたえて声を発せずいた。

さあ行くなら行け！　間もなく起立を命ぜられた。私はこの屠所に引かれる羊の群れの中に立って敢然先頭に立った。右腕は依然荒縄でくくられ数珠つなぎとなっているが、何とか自由になる工夫は無いかと前から注意していたが、運良く私の右腕を縛った細い麻縄は、１尺５寸《註：約４５センチ》位の所で次の太い麻縄に堅く結ばれているのである。これが解けさえすれば自由になれる！　よし！　これだ！　と歩きながら縄のコブを両手で握っているように見せかけ、見つからぬように必死になって爪を立て幾度かほぐして見た。ああこれが生命を救って呉れた麻縄だ。刑場までの約１５分位の間に、とうとう一念こもる指先の力は、遂にこの結びを解いてしまった。私は依然この結び目を堅く掌中に握

って進んだ。

銃殺場はウネウネした路次を、突っ切ると城壁に突き当たった行き詰まりの所にある。城壁の内側は石垣が崩され５０度位の傾斜になり、その中腹に１００人位の人が立てる程の広さがある。傾斜の前は、どぶになっていて、その広さは７・８メートル位だ。どぶを隔てて射手の立つ場所が設けられている。どの辺一面には如何にもグロな趣向に掘った穴が幾つも作られており、見るからに此の世地獄の如きゾッとする形相を呈したところである。どぶを越える細道を何人も何人もの我が同胞が次々と渡った。私はこの先頭に立っていたので、逸早く城壁のトップに最も近い位置に誰よりも一番上に立った。城壁の上まで僅か５フィートばかりである。牛の如く遅い歩みではあるが銃剣でせきたてられれば已むを得ない。どうやら１００名近くの犠牲者が最後の一人までこの刑場の位置についた。

午後２時半！　殺気が四辺に充ちる。張りつめた神経！　誰か女の声で逃げましょう！と裂けるように叫んだ者がある。最後の一声だ。この瞬間私は反射的に城壁に跳上った。最早逃亡のモーションに移っていたのである。突然身を起こした此の逃亡者に対し、当然の一斉射撃が来た。バラバラバラ、しかし私が城のトップに身を曝して次の瞬間反対側の城の角に手をかけ直滑行で壁面を滑り下りた。どちらが早かったか、それとも全然狙い損ねたか、とにかく二丈余《**註：約２．５メートル**》の城壁の元に下りた時、弾は一弾も身体に当たっていないのである。銃声は後方で猛烈になっている。「ああすまない！　後の人に済まない」悲痛の思いが一時心をかすめた。しかし、あのどん底の張り詰めた緊張から弾き出された私の心身は弾丸のように急速度で銃殺場から離れて行った！

１０間《**註：約２０メートル**》ばかりの藪を抜け過ぎると、直ぐに川である！　私は走って来た勢いでドンブリ飛び込むなり身体を水中にかくしたままで泳いだ。１０メートルも来ると頭を上げてひと息し、又潜って泳いだ。三潜り位で対岸に着くなり更に驀進して目の前の高粱(こうりゃん) 畠の中によろけ込んだ。そのまま直線コースで走る事一少時、又、川である。中途で浅瀬に乗り上げた！　危ない後から弾が来る。最初の川を泳いだ時、これから炎天を走る為には水分がいると水中で考えた！　そこで泥水とは知りながら存分にこれを飲んだ。

敵の手から一歩でも遠ざかるには、左右に偏せず、直線コースをとる事が最も有効である。何時、城壁を越えて追跡隊がやって来るか判らない。右よりも左よりも損だ。真っ直ぐに走るに限ると考えた。池を越えた！　山道を過ぎた。そして４・５０分もすると足は棒のようにこわばって痙攣を起こしそうで危険でならない。洋服が水にずぶぬれで、その重さたるや到底支え切れるものではない。ズボンを脱ぐために一少時は疾走をやめて、後をふりかえると、通州城方面に天を衝いて濛々と黒煙が立ち上がっている。

ああ城は陥ちた。時分は落ちのびるのだ。しかし同胞は今頃どんなにされているのだろうか！　再び脱走者の言い知れぬ哀愁に打たれた。

しかしそんな感傷に耽っている暇は一刻もない筈だ。

追手がつい直ぐ後まで来ているかも知れない。恐らく私の行く先々の道路や村には自動車隊あたりが先廻りしているに違いない。して見れば一刻も早く前進せねばならない。ズボンを脇にかかえ、初めてワイシャツの袖をまくり上げて走った。靴下は何時の間にか失われ裸足となっている。

やがて村落に来た。民家の垣根を飛び、跨いだ築地の下を逃げて走った。村民はこの突

然の闖入者を異様な目を持って迎えた。罪を犯さない罪人の逃亡だ！　村の中の道路を走る横合いから４０がらみの逞しい農夫が１５・６の少年と共に一緒に声を立てながら、私の後を追って来た。ここで彼等に捕まったら再び銃殺場に送られる事必定である。

一寸振り返って見ると彼等は「先生！　先生！」と呼びながら頻りに片手で腕を打って見せる。それは私の左腕の腕時計を呉れ！　との手真似なのだ！　時計をとられてはやり切れないが、彼等に捕まる事を思えば問題にならぬ。よし。やろうと思った。走りながら腕時計を外すとこれを右手に頭高く持って数回ふりまわし、後を向いて地上に置き、それを指さして見せて、そのまま疾駆！

暫くして見ると二人が時計を奪い合っている。占めた！　先ず村民の追跡はチェックするを得た！　又村にかかった。こちらはもうヘトヘトであるのに新手の相手は強敵だ！　私は前回同様、大きくズボンを打ち振り打ち振りボーンと放り出した。ここで第二回の追っ手を押さえた。その度に身にまとうものは一つ一つ減って行く。上着も投げ出し、最後にネクタイを与えた。

遂にワイシャツ１枚パンツ１枚、それにコムバンドが淋しく身体を包んでいるのみ、全く素裸になってしまった。小丘を走る時日本軍の飛行機が２台爆音を立てて頭上を過ぎた！　懐かしい！　しかし今の自分には何の援けにもならぬ。こうして山野を真直に走る事約４時間、大きな蘆の沼の中に突入してしまった。どこか村落の近くらしく、村の銅鑼の音や、直ぐ近くで百姓の濁声なども聞こえて来る。膝を没する沼を渡って何とか出口の発見を求めたが、恐ろしく密生していてどうにも出られない。

とうとうそこで日が暮れた。空は紅く焼け水面に映っている。一日目が終わった。

◇

ここまで天運に恵まれ、生きている自分を強烈に意識した。このままの状態を継続して行けばよいのだ。そうするうちには何時か、北京に辿りつけよう。先ず生き続けることが第一義だと考えた。かくて私は、その後二晩を野に宿り死と闘い飢渇を克服し、三日目に再び或る村落で３００名ばかりの冀東保安隊の手に捕らわれ、二度死刑の宣告を受け銃弾に曝されたが、天運我に旺盛であったか、一弾も身に受けず遂にそこも脱出、三晩四日の死線を彷徨の後、遂に北京朝陽門外に辿りつき、生存の第一報を伝えた。

記者団、憲兵隊、警察署、居留民の熱誠こめる救援の手に迎えられて、朝陽門城壁をロープで引き上げられ、奇跡的にも万死に一生を得たのである。

私の両の腕には、今も尚、第二回遭難ま時に縛り上げられた荒い縄目のあとがドス黒く残っている。これを見つめながら、私は当時の苦難危急を思えばこうして生きて来られた事が勿体無くてならない。

通州で惨虐暴戻な支那兵の兇手のため思わぬ最期を遂げた多数同胞、知人に対し、再三再四その冥福を祈りながら、この遭難手記の筆を擱く事にする。　　（８月１０日余